寄稿

人口減少社会と地方都市の活力再生

107

株式会社さくら都市綜合研究所
主席研究員 清水 秀幸

17 都市の景観を考える

今回の長野市城山公園の再整備を検討するにあたっての要点は、全面改築される長野県信濃美術館と改修される東山魁夷館、そして善光寺から北端の少年科学センターに至るまでの広大な敷地を、いかに賑わいのある回遊性豊かな公園として造形し、再生するかというところにある。

当然ながら人口の減少、超高齢化という社会の動態も視野に入れることになるし、隣接して市立城山小学校や長野清泉女学院中学・高等学校もあることで、安心・安全な公園動線の構成も考慮すべきことは言うまでもない。

また、さらに大切なことは、そこに集い、訪れる人々が時を忘れ、癒され、心豊かな暇（いとま）と、その空間をどう演出するかということである。

そして、心理的景観の中でも、人の心を豊かにし高揚感を満たしてくれるツールとして、今注目されているものに「スポーツ文化」がある。

また、それは地方を元気にし、そこに暮らす人々に勇気・一体感・張り合いを醸成し、そのまちの景観構成にも多大な影響をもたらすことのできる貴重な文化であると筆者は考える。

県内においても、その活躍や快挙に一喜一憂した県内輩出のスポーツ分野や選手をあげれば枚挙に遑（いとま）がない。

冬季スポーツからあげてみると、スピードスケート女子の小平奈緒選手（茅野市出身、相澤病院所属）、男子カーリングチームのSC軽井沢クラブ（北佐久郡軽井沢町）をはじめ、間もなく韓国で開催される平昌（ピョンチャン）五輪には県内から25人が派遣される。

また、昨年末から年明けに行われた全国高校駅伝で9年ぶり2回目の優勝を飾った男子佐久長聖高（佐久市）、そして一気に準優勝に駆け上がった女子長野東高（長野市）、また惜しくも埼玉に連覇を阻まれ、準優勝に終わった全国都道府県男子対抗駅伝の県勢の活躍は目覚ましく、記憶に新しい。

そして大相撲では、毎日テレビの前で手に汗握る木曽郡上松町出身の関脇御嶽海＝出羽海部屋＝（※）など、その活躍ぶりを挙げ始めたらきりがない。

（続く）

※先月14日から東京・両国国技館で開催された1月場所では、初日から7連勝を飾ったものの、勝ち越しを目前に5連敗を喫するなど足踏みを続け、最終成績は8勝7敗だった。

清水 秀幸氏（しみず・ひでゆき）1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市綜合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか6委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長